

# 私の色彩 History

このコーナーでは、  
講師養成講座を修了された方々の  
その後の活躍を紹介しています。

講師養成講座第1期生として多方面で活躍。  
色の楽しさとパワーを伝えながら  
色彩と文化を結びつける本も出版し  
女性を色で元気にする活動にも取り組む。

「色」でこんなにも人の印象が変わるなんて

振り返ってみると、私が育った環境には様々な色があふれていました。母が紳士服や婦人服の縫製の仕事に携わっていたため、家の中にはたくさん生地がありました。左官職人だった父が使う土壁の色見本帳も置いてありました。また、私が通った小・中学校は、植木で有名な埼玉県蕨市というところであり、通学路の沿道には色彩豊かな樹木や花が植えられていました。

私はファッション業界に興味があり、テキスタイルコンパターと呼ばれる婦人服地卸会社に就職しましたが、勤務して8年目の頃、いつか洋服の販売職もやってみたいという気持ちから「パーソナルカラー講座」を受講。

カラー講座の受講で「色」でこんなにも人の印象が変わるなんて！と衝撃を受けたのですが、そのときの講師が、生徒の質問した「利休鼠」を知らなかったという場面にも遭遇。似合う色を分析する前に、まず色のことを知らなければと思い、社内でカラートレンドを扱う女性の助言で色彩検定を受けることにしました。

引き出しをたくさん持ち、  
受講生の気持ちに寄り添える講師に

色の世界を知れば知るほど衝撃を受け、この楽しさを人に伝えていきたい！という目標ができました。より本格的に学ぼうと会社を退職し、第1回の講師養成講座（1997年）を受講することになりました。

「人に伝えるには、その30倍の知識がないとダメだ。引き出しをたくさん持て」という講師の教えは今も私の心に響いています。



▲ 講義の様子



講師養成講座を修了してすぐ同期3人で、飲食店のサンプルケースのディスプレイをしながら、さっそく一般の方を対象にした色彩教育を始めました。この時の経験が私の講師としての原点です。入念なりハーサルにもかかわらず、初めての授業はとても緊張したことを覚えています。もちろん失敗もありました。講師になりたての頃に行った専門学校では、生徒を必ず名前と呼び、居眠りをしたら起こすように、と言われていたのですが、色彩検定対策の授業中に居眠りをした女子生徒からは、「わざわざ名前を呼んで起こさなくても」と後々まで反感を持たれてしまいました。私の配慮が足りず、女子生徒に恥ずかしい思いをさせてしまったわけです。今思うと力が入り過ぎていたのかもしれませんが、臨機応変に生徒の気持ちに寄り添っていくことが大切だと反省しました。

受講生に楽しんでもらえる講義、  
参加型の講義を持ち味に

色を教える際には視覚的に訴える教材を使って受講生に楽しんでもらうことが大切だ——これは講師養成講座の先生から教えられたこと。時節にあった、見せる資料を用意して講義に臨むことは私にとってマストです。例えば学生にはアイドルのイメージカラーを示しますし、地方の講義では、その土地の文化、風土を色と関連づけて解説するようにしています。

また、受講生が理解できているかを確認しながら、一方通行にならない参加型の講義になるようにと教えていただいたのは坂田先生でした。教えていただいたカラーカードの演習もすつと採り入れています。この演習は「ターン」ごとの色相の把握につながり、ゲーム感覚で覚えられると好評です。



橋本 実千代さん  
Hashimoto Michiyo

色彩検定協会認定講師  
第1期生  
カラーコンサルタント  
カラーセラピスト

色にまつわる本の執筆も大きな「やりがい」  
色の楽しさ、  
色のパワーを伝え続けたい

城先生とは協会主催のセミナーで久しぶりにお目にかかったことがきっかけで、「世界のパンチカラー配色見本帳」「色で読み解く名画の歴史」の2冊を共著で執筆させていただきました。また、北畠先生が会長を務める「色彩文化研究会」というサークルでは、3期、13期、15期生の認定講師仲間と共に「色で巡る日本と世界」くらしの色・春夏秋冬」を上梓。念願であった、色と文化を結びつけた本ができました。この本は、若い女性を購読層の中心として考え、知っておくと楽しい、暮らしや文化にまつわる色の話を、歳時記のように紹介できるように、と考えて企画しました。それまで日本と世界の色彩文化を合わせて紹介した、カラフルな本がなかったことに注目して構成しました。執筆にあたって、間違いがあつてはいけないと、さまざまな文献を調べましたが、記述内容が異なっていることが多く、いずれの文章を参考にすべきかなどに悩み、その判断には苦労しました。しかし、実際に見学に行ったり、観光協会に問い合わせ解決したことも多くあり、自分の目や耳で調べたことは、大変勉強になりました。また、この本はテレビや雑誌にも取り上げられ、大変嬉しく思っています。



現在、大学生向けの色彩検定対策講座の他に、小学生から社会人を対象とした色と香りのワークショップや、介護をする人とされる人のカラーセラピー講座、また、いろいろ「コミュニケーション」というグループでは、色で女性を元気にし、エンパワーメント推進につながる講座を各地で行っています。色は身近に当たり前のようにあるため、色の持つ奥深さに気づかない人はたくさんいらっしゃると思います。これから色の楽しさ、色のパワーをたくさんの人に伝え続けていきたいと思えます。



▲ 色鉛筆を使った演習